

売人は紺のジャンパーに黄色のコットンパンツをはいていた。耳の半ば以上をおおう長い髪がアポロキヤップの下からはみだしている。

年齢は二十三、四だろう、と鮫島は見当をつけていた。夕刻のラッシュを間近に控え、急速にふくれあがりつつある、新宿駅西口の雑踏の中で、待ちあわせをしているかのように太い柱の一本によりかかっている。鈍い銀色のミラーのサンダグラスが、キヤップのつばの下で光っていた。

鮫島は七、八メートル離れた別の柱のかげにいた。ジーンズにTシャツ、セーターを腰に巻きつけた格好でしゃがみこんでいる。

晶が歌舞伎町の夜店で買い、プレゼントしてくれたサンダグラスをかけていた。レンズが真円型で、これをかけスーツを着ると、「チャイニーズ・マフィアの殺し屋みたい」に見えるという代物だ。

しゃがんでいるのは、だらしなく見せるためだった。

売人がひとりで商売をしているとは思えない。たいてい他人をよそおったしきてんがいて、巡回の警官や、鮫島のような刑事の張り込みを警戒している。

しきてんはわかっていた。二〇メートルほど離れた売店の横でスポーツ紙を広げている、スーツの男だ。一見、地味なグレイのスーツに赤いタイをしめている。

男がときおり新聞から目をあげて、あたりを見渡すのに、鮫島は気づいていた。

ふたりとも新顔だった。テキ屋系の暴力団・本郷会がシンナーに手をだしたのは最近のことらしい。どこから手にいれるのか、「純トロ」や「スリーナイン」といった高級品を扱っている。

本郷会をバックにつけて「純トロ」を捌く売人が西口にいて、という噂が鮫島の耳に入ったのは二ヶ月前だった。

今ではなかなか手に入らない「純トロ」は割高で、ドリンク壺一本が五千円はするという。それでも一度「純トロ」を吸うと、プラモデル屋で買うシンナーなどは、からくて吸えないと、客は無理してでも欲しがるようになる。

売人には、自分の面が割れていない自信があった。が、鮫島は用心を重ねた。服装を変え、髪型を変え、売人やしきてんに嗅ぎつけられないよう努力した。

鮫島は煙草を吸いたいのをこらえていた。ライターの火や煙は、それとなくではあるが、目を惹く。しかも近くには灰皿がなく、足もとに大量の吸い殻が散らばっていれば、売人でなくとも奇妙に思われるだろう。

鮫島はしきてんに目をやった。男は今、畳んだ新聞を左手に、右手のドリンク剤を飲んでい

ああして空になった塚を、あの男はもち帰るのだろうか、鮫島はふと思った。もって帰って、3
どこからかくすねてきたシンナーを塚に詰める。五千円のいっちょあがりだ。

以前、素人ばかりのトルエン密売グループをあげたことがあったが、きっかけは、自動販売
機横の空き塚入れから、ドリンク剤の空き塚だけをせせと拾っている少年に目をつけたこと
だった。

その少年は十六歳の高校生で、空き塚を百本以上もっていくと、五千円くれる場所があると
聞いてやっていったのだ。少年からその場所を訊き、張り込んだ鮫島は、現われた男を尾行して、
密売グループのアジトをつきとめた。

男は酒屋の次男坊で、店の軽トラックに、そうして買いとったドリンク剤の空き塚を、それ
こそ山のように積んでいた。

アジトには、男と店で知りあい、密売をそそのかした、二十になったばかりのクラブホステ
スがいた。男の幼馴染みの、塗装屋の倅が、グループにはひきこまれていた。男のほうは
ふたりとも、犯罪に手を染めるのはこれが初めてだった。女のほうは立派で、十三のときの暴
走族をふりだしに、万引、売春、恐喝と、じゅうぶんすぎるほどの補導歴があった。グルー
プのリーダーは、一番若い、その女だった。最初の取調べでは、自分は何も知らず、ただアル
バイトで手伝っていただけだと、シラをきったが、あとの男ふたりが、真っ青になって自供
したことで、主犯であることが発覚した。

しかもその女は、ふたりの男両方と関係をもっており、ふたりとも、自分が本命だと信じこ
んでいた。女には別の男がちゃんとして、その男は、傷害で服役中だった。

いきてんの男が空になった塚をクズ籠に落としこんだので、鮫島の想像は外れた。

そして危うく、客を見落とすところだったことに気づいた。

客は、東口からぬける通路の方角からやってきた、二十くらい男だった。赤いビニールの
ジャンパーを着けている。顔に白いマスクをはめ、染めた跡の髪がだらしなくうなじでは
ねていた。マスクの下からのぞく頬に、ニキビが大量にふきでている。

マスクが目印だと気づいたのは、一週間前だった。

シンナー、トルエンの売買で、共通の目印は、口もとにやる手だ。ちようど咳きこむような
素振り、口もとに拳をもつていき、売人のいそうな場所をうろつく。すると、どこからか
目ざとく売人がすりよつてきて、必要な本数を囁き訊ねる、といった寸法である。

だがこの目印は、あまりにも有名になってしまい、取締まりにひっかかることが多くなった
ので、近ごろはさまざまな形に変化してきている。

「西口の純トロ」の白いマスクも、そのひとつだった。

染め跡の残る若者は、両手をジャンパーのポケットに押しこみ、背中をうつむけるようにし
て歩いていた。

売人がしきてんを見やった。しきてんは素早くあたりを観察して、安全だ、という合図を送
る。この場合は、ネクタイにちよつと触れるやりかただ。

以前、巡回の警官が通りかかったとき、しきてんの手はさつと髪をかきあげた。それを見て、
鮫島は笑いたくなったものだ。

指で丸を作り、額にもつていくのは、全国共通の「マップ」のマークだ。が、まさか警官 4

に見られるところでそれをやるわけにはいかない。しきてんだというのを、ひと目で見破られるからだ。

だが反射的に手が顔にのびる癖だけはどうにもならないのだろう。そこで髪をかきあげる動作をブロックサインにしたわけだ。

柱によりかかっていた売人が、すつと身を起こした。自分の前を通りすぎかけていた、染め跡の残る若者に近づく。

その口がわずかに動き、若者が答えた。ふたりの手の間で金がやりとりされるのを、鮫島は見つめた。

売人は左手を、染め跡の残る若者の肩に回していた。右手が、若者のさしだした、折り畳んだ紙幣をうけとる。ついで肩に回した左手に隠しもった鍵を若者に手渡す。

鍵は、新宿駅に数えきれないほどあるコインロッカーのひとつのものだ。

売人が再び若者に囁きかけた。おそらくロッカーの場所を指示したにちがいない。

若者がくると踵をかえし、もときた方角に歩きだすと、ふたりの体は離れた。

若者は指示されたコインロッカーの前にいき、鍵を開ける。すると、扉の向こうには、紙袋に包まれ、ドリンク剤の壺に入れられた「純トロ」が待っている、というわけだ。

若者の姿が雑踏に吞まれ、すぐに見えなくなると、売人はゆっくり歩きだした。しきてんは動かない。

鮫島は立ちあがった。これを待っていたのだ。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。